

ナチスの対露「バルバロッサ作戦」と重なる NATO の動き

By Finian Cunningham

Information Clearing House, March 13, 2015

NATO の「大西洋決議作戦」は、今週、さらに新しく米軍部隊がバルト地域に到着するとともに、更に前進した。東欧を“ロシアの侵略”から守るという口実のもとに、100 台以上のエイブラムズ戦車とブラッドレー装甲護送車がラトビアに入った。先月には、同じような軍事援護の車両隊がエストニアの Narva の町に入り、ロシア国境からほんの 300 メートルの所を、米国旗をひるがえして行進した。

ナルヴァは、東方へ剣のように鋭くロシア領に突き出ている。それは、モスクワに次ぐ第 2 の都市で、1941-44 年間に、ナチスドイツによる軍事攻撃の惨禍を受けたサンクトペテルブルグから、ほんの 100 キロほどの距離にある。サンクトペテルブルグ（前レニングラード）の包囲は、100 万以上のロシア人を、主に飢餓によって死なせたが、結局、ドイツ国防軍は、ソ連赤軍によって押し戻され敗北した。これについては後で述べる。

現在に戻って——アメリカの将軍 John O’Conner は、ラトビアの最新の展開について、アメリカ軍は「ロシアの侵略を食い止める」だろうと言い、オーウェル流の言い方で「自由は勝ち取らねばならない、自由は防衛しなければならない」と付け加えた。

アメリカ主導の大西洋決議作戦は、過去 1 年間に、バルト諸国と NATO の他の東欧同盟国での、米軍事プレゼンスの増加を見せた。形式的には、米軍は“移動任務”についているだけで、NATO の常駐軍をロシア国境内に留めるという、ロシアとの過去の合意を破ってはいない。しかし解釈は別にして、ワシントンは実質的に、かつてのモスクワとの約束に違反し、戦略的に微妙な領域に、軍事的に堂々と足を踏み入れているとみなさないわけにはいかない。過去 1 年間に、バルト地域での軍用機の発進が、黒海での NATO の戦艦とともに 4 倍に増えている。

“ロシアの侵略”という言葉に乗せられて、ワシントンと、リトアニア、ラトビア、エストニアの右翼政府は、1990 年に調印された（NATO-Russia Founding Act のような）規制合意によって禁止されている行動、つまり軍隊をロシアの西の国境の際まで進めるといふ、勝手なことをやり始めた。大西洋決議作戦は、ロシアがウクライナなどで最初に侵略を行ったという、根拠のないアメリカの唱える主張——プロパガンダ——に基づいている。事実を言

うなら、ロシアは、ウクライナにもどんな西側の国にも入っていない。

このような明白な事実の転倒は、アメリカ主導のプロパガンダ攻勢における“心理作戦”の一部である。

アメリカは、現実の火炎銃ドリルを含む軍事訓練を命令した。そしてパトリオット・ミサイルとクルーズ・ミサイルが、来月にかけて、バルト諸国、ポーランド、チェコ共和国、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、それにロシアの南脇腹に接するウクライナとグルジアに、設置される予定である。最後の2国は、ワシントンの地政学的アジェンダの、より広い、非NATO次元を明らかにしている。

アメリカの大佐 Michael Foster は、ヨーロッパ中で行われる予定の軍事演習について、「夏の終わりまでに、バルト海からずっと黒海にまでおよぶ軍事行動を、目撃することになるだろう」と言っている。

このアメリカの大佐が、興奮した自分の軍事行動の見通しを、理解しているかどうか疑わしい。問題は一つには、アメリカ人と他の多くの西洋人の歴史理解が、非常に乏しいことである。彼らは“西側の勝利の歴史”に酔いしれているが、現実の原因と結果を抜きにして考えている。それは原因的な力の省略された、そして西洋列強のその後の行動を正当化するのに用いられた、時系列的な出来事の宣伝版である。この酔いしれた無知こそ、なぜ歴史がこれほどしばしば繰り返されるのかを説明している。出来事の真の原因を理解することなしに、どうして繰り返しを避けることができるだろうか？ そしてこそが、西側の支配者連合体が、大衆の目から自分たちの犯罪を隠して戦争をする理由である。

アメリカの主導する大西洋決議作戦を、もっと現実的な、歴史的な観点から見てみよう。すると我々には、それが一つ前の軍事的展開、すなわち「バルバロッサ作戦」と、規模の上でも、間違いなく不気味に共鳴することが理解できるであろう。バルバロッサ作戦は、1941年夏に、ナチスドイツによって始められた、ソビエト・ロシアへの大規模な侵略であった。

ついでに言えば、これは扇情主義に溺れた皮相的な類推ではない。イデオロギー的な動機之力をよく調べてみれば、そこには一貫した連続性があることがわかる。

ナチスドイツの1941年6月の、挑発によらないソ連への攻撃は、現代の戦争史において最大の軍事侵略であった。それは“武装親衛隊”と配備軍の絶滅部隊の手によって、約3千万のロシア人の死をもたらし、サンクトペテルブルグやボルゴグラード(スターリングラード)のような都市の、強制された飢餓、病気、恐ろしい略奪を伴っていた。

バルバロッサ作戦は、大西洋決議作戦のように、バルト海から黒海にまで伸びており、鍵となる侵略地点はエストニア、ポーランド、ウクライナであった。そして不思議なのは、ウクライナ東部のロシア民族に対する、現在のキエフ政府の攻撃が、ロシアにとって、なぜそれほど挑発的と考えられるのだろうか？ バルバロッサ作戦の進行中、ウクライナの軍隊は、ナチスの武装親衛隊を助けて、何百万という同胞ウクライナ人、ロシア人、ポーランド人、ジプシー、ユダヤ人、その他の大量虐殺を行った。これらの者すべてが、特権的なゲルマンの“アーリア人”によって絶滅されるべき“Untermenschen”（人間以下の者）であった。

アドルフ・ヒトラーが1925年に、悪名高い宣言書『わが闘争』を書いたとき、彼は、ドイツの帝國的な偉大さは、ソビエト・ロシアを滅ぼすことによって実現すると考えていた。必要な“Lebensraum”（領土拡張）は、彼が「ボルシェビキのユダヤ人に支配された人間以下のスラブ人」が住んでいると軽蔑した、東部地域の征服によって得られるものだった。ヒトラーのユダヤ人憎悪に匹敵するものは、彼の共産主義ロシアへの憎悪だけである。彼らはともに根絶すべきものだった。

西洋の在来の歴史は、ヒトラーの反ユダヤ主義と、主にユダヤ人に向けられた“最終決着”だけに焦点を当てる傾向がある。実は、ヒトラーとナチスドイツは、ソビエト・ロシアを壊滅させることに同じくらい執着していた。このソビエト・ロシアへの執着は、第二次大戦に至るまでの何年かの間、西洋の支配者グループ内部で、親しく共有されていたものである。

第一次大戦の終わった1918年、そのすべての恐ろしい記憶と2千万の死亡者にもかかわらず、アメリカ国務長官のロバート・ランシングは、全く別の問題に悩まされていて、こう書いた——「ボルシェビズムは、人間がこれまでに考えた最も忌まわしく恐ろしいものだ。…それはプロシヤ化されたドイツより、はるかにもっと悪いもので、人間の自由にとってますます大きな脅威になるだろう。」

ロシアの1917年の10月革命と、世界中で起こった共産主義の内乱の脅威は、西洋の支配層に途方もない悪夢を与えるものだった。これは当時の資本主義の危機と、経済不況、社会の崩壊、見えてきた大恐慌に裏打ちされるもので、今日の危機に似ていなくもない。

ポルトガル、スペイン、イタリアからドイツに至る、ヨーロッパのファシズムは、ロシアの10月革命に鼓舞された社会主義運動の広がりに対する防波堤として、西洋のエリートたちに好意をもって迎えられた。工業の能力をもつヒトラーのドイツは、特別に重要な、腕力をもつ反ソビエト政権と見られ、台頭するヨーロッパの労働運動を潰してくれるもの、西洋の資本主義にとって、地政学的なロシアの対抗者と考えられた。

ウォール街の銀行から、フォード、ゼネラルモーターズに至る、アメリカの企業が、1930年代に、ナチスの戦争機械を作るために多大の投資をしたのは、記録された事実である。ヒトラー総統はまた、ネヴィル・チェンバレン首相と、外務大臣ハリファックス卿に率いられた、イギリスの保守派エリートに密かに取り込まれ、これによって彼は、東方への拡張の“自由の保障”を与えられた。ナチスドイツが1938年に、オーストリアとチェコのズデーテン地方を編入したとき、それは、西洋の支配者たちが静かに応援し、最終的に意図されていたソ連への攻撃の、始まりにすぎなかった。(Alvin Finkel, Clemont Leibovitz, *The Chamberlain-Hitler Collusion* を見よ)

バルバロッサ作戦が1941年夏に始まったとき、この歴史上最大の軍事侵略は、こうして、地政学的なライバルとしてのロシアを踏み潰す、深く支えられた戦略的アジェンダを実現しようとしていた。それはドイツだけでなく、密かにナチスの戦争機械を作ってきた西洋の権力者にとっても同じ意味をもった。

歴史的マトリックスの気まぐれによって、西側諸政府は、自分自身の戦略的利害のために、ナチスドイツと戦うことになった。しかし見逃してならないのは、第二次大戦が終わるとともに、これら同じ西洋列強が、ソ連との新しい冷戦に役立たせるために、ナチスの工作員、情報部員、暗殺専門家を集め始めたことである。ウクライナとバルト3国が再び、ナチスのバルバロッサ作戦のときと同じように、ロシアを敵とするための戦後の口実として役立つようになった。ただこの場合、彼らはCIA、MI6、それに1949年に結成された米主導のNATOによって募集された。

今日、ロシアは、もはや国家イデオロギーとしては、ボルシェビズムを公言することはないだろう。そして我々はここで、現在の米主導のNATOのロシア領をめぐる軍事行動が、全面的な軍事攻撃へ突入すると予言しているのではない。それは主たる問題とは別である。ポイントは、ロシアが依然として、アメリカと西側の世界的覇権に対する、厄介なライバルになっていることである。ウラジミール・プーチン下のモスクワは、アジアや他の残りの世界に対するアメリカ主導の資本主義的支配の、邪魔物として見られている。ロシアの、国際法を厳守するという確固とした態度は、いつでもどこでも、自分の地球的覇権と考えているものを確保したいときに武力を用いるワシントンの、傲慢なわがままにとって、面倒な障害になっている。尊敬される世界的政治家としての、プーチンへの国際的な支持は、アメリカの支配者たちへの広範囲な軽蔑と相まって、これもワシントンにとって大きな癩の種の一つになっている。アメリカの先導するロシアへの敵意と、大西洋決議作戦から発する隠れたシグナルを評価するには、このようなコンテクストがなければならない。

過去一世紀における歴史的共鳴も同じである。バルバロッサ作戦と大西洋決戦作戦は、ロシアに対する西洋の侵略という同じ連続体の一部である。ロシアは西側の覇権に対する対抗勢力と考えられており、だからこそ排除しなければならない。

ロシアにとっては、大西洋決戦作戦の、脅威を与える軍事的包囲は、過去との深刻な、悪い共鳴を与えている。ほんの74年前のバルバロッサ作戦は、限りない人間の苦しみを通じて、ロシア人の意識に焼き付けられている。ロシアはその時、壊滅の瀬戸際にあり、その人民の英雄的な何百万人もの犠牲によって救われた。どんな国家も、決してこれほどの危険に近づくことは今後もないだろう。

西側世界は歴史上、決して、ロシア人民が経験したような深さにまで、苦しんだことはない。したがって西側の多くの人々、特に甘やかされたエリート支配者たちは、ロシア人の祖国を守ろうとする決意がいかに強いかを知らない。ウラジミール・プーチンの出身地はサンクトペテルブルグ、100万の人々がナチスの包囲によって死んだ都市である。

西側のリーダーたちが、“自由の防衛”について喋りまくり、ロシア人を“偏執狂”として笑いものにするとき、彼らの酔いしれた、恐るべき歴史の無知は、さらに大きな驚きの種である。

ロシアは侵略の連続性を、正しく感じ取ることができる。